

令和7年度 わかふじ幼稚園 自己評価・学校関係者評価報告書

2026年3月10日
わかふじ幼稚園

1. 本園の教育目標

健康で、明るく、素直な、なんでも一生懸命に頑張る子を育成する

指導方針：

『幼稚園教育要領（文部科学省）』に準拠すると共に、次の事項を重視した指導をめざす

- ・園児が遊んで取り組めるような雰囲気や環境づくりをする
- ・いろいろなことをやってみようという意欲を持てるようにする
- ・仲良く、ともに喜び合う気持ちを持てるようにする
- ・小さな発達を大切にし、根気よく繰り返し指導する

2. 重点的に取り組む目標・計画

2025年度年間目標：クラスをこえた友だちとの関わりを大切にしよう

- ・他のクラスや先生にも自分から挨拶をしよう
- ・どの学年の子でも名前呼び合える友だちになろう

2025年度クラス目標：

ぴよぴよ組（満3歳児）

- ・保育者や友だちとの関わりを深め、新しい環境に慣れ、安定して過ごす
- ・身の回りのことを援助してもらいながら、基本的な生活習慣を身に付ける

たんぽぽ組（年少）

- ・保育者や友だちに親しみを持ち、友だちとふれあいながら、安心して遊びや活動に取り組む
- ・園生活の流れが分かり、自分の身の周りのことをしようとする
- ・自分の興味・関心、思いを自分なりの方法で表現する

ふじ組（年中）

- ・全身のバランスを取りながら身体を動かして遊ぶ楽しさを味わう
- ・豊かな遊びや生活の経験を通して必要な言葉を身につけ、いろいろな方法で表現する
- ・友だちや保育者の話をよく聞き、相手の思いを受け入れながら自分の気持ちや考えを伝えよう
- ・全身のバランスを取る動きを楽しみ、健康的な体を育もう

うめ1組（年長）

- ・友だちの良いところや頑張りをたくさん見つけて共に成長を喜び合えるクラスになろう
- ・自分で考えて行動できる力を身につけよう
- ・友だちと協力して成し遂げる達成感を味わい、充実した一年にしよう

うめ2組（年長）

- ・自分で考えて行動する力を伸ばし、挑戦する楽しさ、やり遂げる喜びを味わい自信へとつなげていく
- ・自分の考えをしっかりと持ち、自分らしさを発揮し、友だちと認め合い、心豊かに過ごす

2025年度 重点的に取り組む教育目標；

- ・年間保育における行事の意義、行事の位置づけを「子ども主体の保育」の観点から総合的に検討する
- ・食育推進を通して、幼児期における食を通じた主体的行動を教育課程に位置づける
- ・前年度に引き続き、子どもを中心に保育の実践を考え、子どもを中心とした視点から教育を捉え直す
- ・就学までに育ててほしい子どもの姿に向けての園内連携と幼小中連携を推進する
- ・前年度に引き続き、キッズイングリッシュ、わくわく(縦割り)保育、体力向上プログラムを推進する

2025年度 園の取組み課題；

- ・働き方改革の推進
- ・子育て支援の拡充
- ・満3歳児保育と未就園児教室の位置づけの明確化

3. 自己評価の経過

2025年1月	2025年度学事暦検討
2025年3月	それぞれのクラスごとに2024年度年間指導計画ふりかえりを実施 2025年度自己評価課題設定／2025年度重点的に取り組む目標設定
2025年4月	学校関係者評価会議外部委員依頼
2025年5月	それぞれのクラスに応じた年間指導計画の立案
2025年5月	「日常生活の中で身体を動かす活動」アンケート実施／保護者評価結果報告
2025年7月	年間指導計画および体力向上年間プログラムの1学期ふりかえり自己評価 2・3学期指導計画および体力向上年間プログラムの再構築
2025年7月	「お泊まり保育」アンケート実施/保護者評価結果についての自己評価
2025年8月	「希望給食意向調査」アンケート実施／保護者評価結果報告
2024年12月	年間指導計画および体力向上年間プログラムの2学期ふりかえり自己評価 3学期指導計画および体力向上年間プログラムの再構築
2025年12月	「園生活ふりかえり」保護者・教員アンケート実施(12/22～) 学校関係者評価会議開催
2025年12月	教職員による2025年度課題自己評価実施(12/24～)
2026年1月	教職員による2025年度自己評価点検評価会議(1/15)／自己評価報告書作成
2026年1月	2025年度学校関係者評価委員会開催(1/29)
2026年2月	2025年度自己評価・学校関係者評価報告書の作成
2026年3月	自己評価・学校関係者評価報告書のHP公開

資料1 年間指導計画

4. 2025 年度 重点的に取り組む教育目標に対する取組み状況

年間保育における行事の意義、行事の位置づけを「子ども主体の保育」の観点から総合的に検討する

運動会：気候変動による危険な暑さに伴い、昨年同様に開催時期を9月3週目から10月1週目の実施とした。雨天順延による来場者日程調整の負担を考慮し、今後も雨天時は体育館開催とする。

リズム発表会：市民会館は立て替えのため、今後5年間は湘南台文化センターを会場とする。次年度以降、「わかふじシアター」として12月に湘南台文化センターで劇、ダンスの発表会を行なう。2月に園舎ホールにて「わかふじハーモニー」として、歌、合奏の発表会を行なう。これにより2学期における日常の子ども主体の保育活動の充実を図る。

作品展：次年度より、1学期、2学期の個人面談期間に一部作品の展示を行なう。2月「わかふじハーモニー」実施の同日に、一部の作品展覧会を行なう。

食育推進を通して、幼児期における食を通じた主体的行動を教育課程に位置づける

- ・藤沢市親子すこやか課の栄養士による調理実習を年長6月、年中7月、年少と満3歳は9月に実施した。
- ・保護者向けに親子すこやか課による食育に関する講演会を実施した。
- ・2年目となるバケツ稲づくりも、保護者の協力を得て、芽出しから収穫し、試食までを経験した。
- ・園庭のゆすらうめを収穫した年長児は、ゆすらうめジャム添えアイスクリームを試食した。
- ・お正月にかき餅を焼いて食べ、季節の行事にちなんだ食べ物について学習した。

資料2 わかふじ通信（2025年度）第10号 稲の育ちをふりかえる子どもの育ちを見つめる

前年度に引き続き、子どもを中心に保育の実践を考え、子どもを中心とした視点から教育を捉え直す

・子ども主体の保育を実現する方法のひとつとして、保育ドキュメンテーションの研修（7月～10月）で学んだ教員を中心に、園全体で保育ドキュメンテーションに取り組んだ。保育計画通りの活動に留まらず、子どもの姿を基に、子どもの興味関心を広げ、保育の中にどのように広げるかを考え、実践していくことを目指した。

・ピクコラージュアプリを使用し、隙間時間を狙い、継続に無理のない時間で（15分）、子ども目線で、情報を絞り、配信に向けサイズを揃えて見やすくなるルールができた。ドキュメンテーションのふり返りのフォトカンファレンスを毎週行い、子ども主体の保育をどう支えるかの共通意識を持った。

・子どもの学びを見直す視点から、幼児期の終わりまでに育てて欲しい10の姿からドキュメンテーションを読み解く視点を明確にした。

・原則として、毎週フォトカンファレンスを木曜日に実施し、金曜日に保護者に配信が定着した。

資料3 2025年度 神奈川県私立幼稚園研究教育大会湘南地区大会 第2分科会

就学までに育ててほしい子どもの姿に向けての園内連携と幼小中連携の推進

・第一中学校との連携は、連携担当教員が中心となり連絡調整を重ね、年間計画の中で位置づけ、教育課程の検討、実施、ふり返りなどが行なわれて、継続的視点で発展した。

資料4-1 2025年度 藤沢市立第一中学校との交流

資料4-2 タウンニュース11月28日（金）号記事

資料4-3 第一中学校 第3学年便り No29

資料5 2025年度 架け橋プログラム・幼小・幼保連携実施

前年度に引き続き、キッズイングリッシュ、わくわく(縦割り)保育、体力向上プログラムを推進する

・キッズイングリッシュ

各学年、週一回の 15 分レッスンを継続した。曜日や時間を固定せず、週末打ち合わせで翌週の保育内容との関係で柔軟に時間設定を行うやり方が定着してきている。

資料 6 わかふじ通信 (2025 年度) 第 8 号 キッズイングリッシュクラス「クローバー」

・わくわく(縦割り)保育

資料 7 わかふじ通信 (2025 年度) 第 9 号 わくわく保育特集

・体力向上プログラム

学年ごとに①体力向上プログラム年間教育課程を作成、②5 月、1 月に年少、年中、年長の体力測定 (25 メートル走、立ち幅跳び、ボール投げ、捕球、体支持、両足連続跳び)、③「日常生活の中で身体を動かす活動」調査、④年間を通した園外保育を軸に一日、60 分以上体を動かす活動を日常に取り入れてきた。

資料 8 2025 年度 体力向上プログラム年間計画

資料 9 わかふじ通信 (2025 年度) 第 3 号 第 1 回体力測定結果

資料 10 わかふじ通信 (2025 年度) 第 5 号 「園児が体を動かす活動」実態について

資料 11 わかふじ通信 (2025 年度) 第 11 号 4 月からの園外保育をふりかえって……そしてこれから

わかふじ通信 (2025 年度) 第 14 号 わかふじ幼稚園 体力向上プログラム 2025 年度後半の測定結果報告

5. 2025年度 園における取組み課題に対する取組み状況

働き方改革の推進：

業務プロセスの見直し（QR 決済、ICT 化）、計画と見通しを明確にすることで、効率の良い仕事の進め方を促進した。有給休暇の取得率を上げ、残業減少に向けて4月より教育職員を増員した。

4月初めにわかふじ幼稚園全労働者に対して、過半数を代表とする者を選出することを知らせ、立候補による信任を経て決めた。

園からの情報配信内容を明確化して「月の予定(毎月)」、クラス活動報告「みのり便り(年5回)」、園全体の「わかふじ通信(年12回)」業務負担を軽減した。9月末より毎週ドキュメンテーション配信、11月より毎日の「今日の健康一覧」を掲示した。なお園内外に向けてインスタグラムの定期配信は滞り、課題が残った。

子育て支援の充実への取組み：

半数の家庭が就労による子育て支援制度を利用し、フルタイム就労家庭も増加し、幼稚園入園以前に保育施設の利用経験者も増加している。年間を通じて15%の家庭が早朝保育利用をしている現状である。またりぼん組(預かり保育)利用も一定の需要がある。そこで、年間の預かり保育実施回数を見直し、2学期からは園行事の振替休日、引渡し訓練日など預かり保育を行なうことにした。10月からは木・金曜日に希望給食を導入した。今後も就労家庭の子育て支援ニーズに応じていく方向で検討している。

預かり保育は5名の非常勤職員がシフト制で勤務している。職員の所得税「年収の壁」制限により年末時期にシフト調整に支障があったため、預かり保育の安定した運営体制の確立が課題とされた。今後は「預かり保育と教育時間を一体化した保育の質」を整備していくことで、充実した豊かな一日の活動を提供する事が課題とされた。また、子育てにおける就労家庭の現状を踏まえ、預かり保育時間帯の拡充も課題とされた。

満3歳児保育と未就園児教室の位置づけの明確化

満3歳児保育は、2025年度は、5月から2026年2月の期間で受け入れをした。在園児のきょうだいの場合には、受入れ側もお子さんを取り巻く環境を把握できているが、そうでない場合はご家庭との接続を丁寧に行なっている。年間を通しての随時入園、個への配慮、満3歳児と年少児が共にする活動と独自の活動のあり方などを、年間計画に位置づけるようにした。次年度は4月からの受け入れを行う。

未就園児教室は、親子にとって当園の様子を知る機会であり、満3歳児入園のきっかけであり、次年度入園児の段階的保育として位置付く。次年度以降、未就園時教室の開催日や、位置づけを明確に知らせていくことが課題とされた。

6. 自己評価指標の達成および取組み状況

今年度の自己評価指標は「教育目標・教育方針」3項目、「教育課程・指導計画」6項目、「教育環境」6項目、「教育の内容・方法」6項目、「教師の役割・資質向上」6項目、「子育て支援」4項目、「地域や関係機関との連携」4項目、「運営管理」6項目であった。

各教職員は、各指標につき、それぞれの評価項目が達成されているかどうかの4段階評価を行い、その評価結果の根拠・理由になる取組み現状、改善を要する点や課題を記述した。各教職員が自己点検評価をした結果を自己点検評価会議で総括し、評価指標ごとに達成の程度、園の取組み状況について、評価水準の判断をした。また教職員の記述より抜粋した内容を、表1「評価指標の達成および取組み状況」に示した。

取組み課題の到達度については、全8指標のうち「教師の役割・資質向上」指標は「達成されている」というB評価だった。その他の7指標は「十分達成されている」というA評価だった。今後の課題としては次の点が指摘された。

「教育目標・教育方針」

- ・子ども主体の保育の展開について、年間を通した指導計画を年齢に即して積極的に取り組んでいく。
- ・子どもが自分で考え、挑戦し、やり遂げる経験を積めるような関わりをさらに進める。

「教育課程・指導計画」

- ・体力向上プログラム3年間の取組みを園外保育計画の成果と合わせて2025年度末に振り返る。次年度は新たに体力向上の教育課程のあり方や、入園から卒園までの継続的取組みを再考する。
- ・保育の意義を明確にし、教職員の教育観共有を図りながら行事の見直しに基づいて、歴史ある園の良いところは残しつつ、今後も新しいことを取り入れていく。秋から冬に行なわれている「リズム発表会」、「作品展」を再構成し、「わかふじシアター」「わかふじハーモニー」とした新たな構成を模索する。

「教育環境」

- ・異年齢交流は、わくわくタイム、園庭遊び、園外保育など日常保育の機会利用方式を今後も進めていく。
- ・保育ドキュメンテーションによる毎週の保育カンファレンスにより、教職員が幼児の視点から見える世界の理解を深めてきたことを継続する。また、子どもが意欲的に取り組み、子ども自身の達成感につながる活動実践を教員相互に共有するよう努める。

「教育の内容・方法」

- ・中学校との教育課程は進んでいるが、小学校との架け橋プログラム構築が課題となる。
- ・3年間を通して幼児期の体力向上、運動遊びへの取組みは、重点的保育計画として継続する。
- ・幼児期の性教育(身体の違い、プライベートゾーン)を子どもの人権教育の視点から、3年間を通して系統的な教育内容の構築が課題となる。

「教師の役割・資質の向上」

- ・従来より研修や資格取得の費用を園で一部負担しており、オンライン研修、対面研修とも積極的に参加しているが、全ての研修内容が全員に共有されているわけではない。報告書や資料を全員が見られるよう園内インフラを整え、申し合わせで研修内容を伝える等、研修内容の共有をルール化していく必要がある。

「子育て支援」

- ・未就園時教室が利用しやすいように平日開催だけでなく、土曜開催も検討する。
- ・就労家庭のニーズを踏まえ、預かり保育時間を拡大する。
- ・外国にルーツのある家庭の保護者に、きめ細かくフォローができるように意識する。
- ・令和8年度から国で本格実施される「こども誰でも通園制度」について引き続きの学びを教職員で深める。

「地域住民や関係機関との連携」

- ・幼中連携の教育課程は実現した。架け橋期のアプローチカリキュラムに向けて小学校との取組みを進める。
- ・地域の0～2歳児の小規模保育施設との交流を継続し、近隣の保育施設とも交流を継続する。

「運営管理」

- ・定期的に地震・火災を中心とした避難訓練、引渡し訓練を行なっているが、様々な個別状況を想定した訓練も含め、幼児期の防災教育のあり方を検討していく。

表1. 評価指標の達成および取組み状況

評価：A(十分達成されている)/B(達成されている)/C(取り組まれているが、成果が十分ではない)/D(取り組みが不十分である)

	内容	総合	2025年度の取組み状況
教育方針	①クラスの年間教育目標は具体的保育に結びつけてきた ②クラスの年間目標は子ども達の園生活に生きている ③教育方針は、その時々の幼児にあったものになるよう見直ししている	A	担任同士「どんなクラスにしたいか」「子どもたちをどのように成長させていくか」を話し合い、4月に年間目標を立てた。それを基に、週案を立て、日々の保育で実践、振り返りを行い、改善の循環ができていた。毎週末には1週間の保育活動を振り返りによる他教諭からの助言や提案を保育に活かすクラス運営を行った。毎月の指導計画はクラス便りとして保護者に共有した。年度計画は学期末に振り返り、計画と進捗状況に照らして、必要に応じて見直しを行い実践を踏まえたアップデートを行った。
指導計画	①園の教育課程は、教育目標を生かして作られている ②子どもたちの年齢ごとの教育課程がある ③園の教育課程は、教職員が話し合いながら作られている ④園の教育課程は必要に応じて見直されている ⑤幼児のしたいことや、興味のあることを取り入れられるようになっている ⑥幼児の教育に、地域の自然や施設を活用している	A	園の教育目標を生かし、教員の話し合いに基づき学年ごとに教育課程を作成している。園外保育で全クラスが地域の公園(吉野町・烏森・長久保・御殿辺・新林)、地域子どもの家(元氣王国・鶴つとりで・わくわくランド)、図書室、消防署、スーパーマーケット見学をした。新たな取り組みが定着したり、本年度は、活動しながら年間の行事のあり方の見直しを大きな取組み課題とした。話し合いを重ねて、次年度以降の年間を通した行事の時期や内容についての見直しが提案された。
教育環境	①活動の環境を作る時には指導計画を意識している ②幼児の動きや視線の動きに気を配った構成をしている ③幼児の思いや言動を参考にしながら、保育室の装飾や展示を考えている ④自然や社会との関わりが持てるような体験(芋掘り・消防署見学など)を取り入れるようになっている ⑤環境構成について教職員間で積極的に意見交換が行われている	A	2年目となるわくわく保育で、異年齢の子どもとの仲が深まる活動を意識して構成した。保育におけるドキュメンテーションが始まり、子どもの思いや興味・関心を教員相互に共有・検討する機会が増え、保育の質の向上に繋がった。職員間で共有し意見交換を行い、子どもたちの「なぜ」や「やってみたい」に目を向ける機会が増えた。改めて、子どもの興味や思いを見つめ直すきっかけとなり、子ども主体の保育への意識が高まった。
教育の内容・方法	①教育内容や方法は、園の教育課程を基にして作られている ②幼児の家庭での様子を参考にしながら、援助の内容を工夫している ③日頃の生活でSDGs、性教育(身体の違い、プライベートゾーン)を意識した工夫をしている ④遊びを通してルールを学び、感情をコントロールする経験を工夫している ⑤幼児が意欲的に造形活動(描画・製作)をする時間を大切にしている ⑥食育の取組みを行なっている	A	昨年度のバケツ稲づくり経験を活かし保護者の有志も募り、精力的に行った。4月の連休前から芽出し、土壌作り、苗の植え替え、水抜き、稲刈り、脱穀、精米、炊飯し試食し食育に繋げた。栄養士による調理実習では、食べ物「出来上がる工程」を実感し、食への関心や感謝の気持ちを育てる学びとなった。プール活動や水遊びの着替えをきっかけにプライベートゾーンを意識した着替えなどを年齢に合わせて指導した。登降園時に保護者から得た情報をもとに、その日の体調の変化や不安な気持ちに配慮し、支援が必要な子には、園と家庭でそれぞれの視点で見られる幼児の様子をすり合わせて、より良い関わりができるように話し合う時間を持った。
教師の役割	①一人一人の幼児をよく観察するように心がけている ②すべての幼児に平等に接するように心がけている ③その場にふさわしい言葉遣いができる ④研修に行った先生の研修内容は全員に紹介される ⑤幼児のモデルになれるよう気をつけている ⑥保護者との信頼関係ができていく	B	・他の子と比べず昨日より今日、1学期より2学期とその子自身の成長をみつけ、またそのことを幼児に伝えられるように、見守り観察している。また、異年齢保育によって、自分の持つクラスだけでなく他クラスの幼児とも関わる機会がある。 ・普段の子どもたちの様子を週に1回配信するドキュメンテーションや登降園時での1日の活動の報告、個人面談などから、保護者とのコミュニケーションをはかり、信頼関係を築いている。
子育て支援	①保護者の子育てについての相談にのっている ②子育て講演、情報提供を行っている ④園庭開放など未就園時の親子の子育てを支援している ⑥幼児のことについて必要に応じ、行政や他機関と連携している	A	就労家庭の支援を充実、拡大した。振替休日や行事がある日でも可能な限りで預かり保育拡大、早朝保育のキャッシュレス化、木・金曜日の希望給食の実施などを実現した。事前に意向調査を行い、あらためて子育て支援の高いニーズがあることが確認された。次年度へ向けてさらなる拡大に努めていく。親子すこやか課より「幼児の食と栄養」講演会を保護者に実施した。未就園児教室での相談、保護者からの相談に随時応じている。
地域との連携	①地域の人々と親しく挨拶ができる ②地域の小学校の行事や公開授業を見学に行く ③地域のお祭りや伝統行事に参加することがある ⑤地域の施設、園外との交流を大切にしている	A	年長は昨年度から続く中学校との交流が年間を通した教育課程が、より計画的に組まれてきた。パディを変えないことで、中学生と幼児が親近感をもって交流が継続した。近隣の保育園との交流(公園で遊ぶ・一緒に小学校に行く)も昨年より交流園の回数も増えてきた。小学校との交流会数が制限される中で、別の小学校にも交流を広げた。教職員が、近隣の通常級だけでなく、平塚豊学校、白浜養護学校、近隣の特別支援学級、通級指導教室などの視察を行い見分を広げた。
運営管理	①園児や保護者のことを園の外で話題にしない ②現金の管理は間違いないようになっている ③災害時の避難の対応、事故報告書の対応を行なっている ④保護者の意見はしっかりと聞き、園長に報告している ⑤園の施設の安全点検、衛生管理を行っている ⑥園内での役割分担が決まっている	A	・集金に際して中身の確認、キャッシュレスの支払い画面の確認を意識して実行している。 ・保護者からの質問で不安なことは、園の共有認識に基づき保護者対応することを心掛けた。 ・安全点検、大掃除は学期ごとに行っている。また、毎日の掃除の場所、どこを誰が行うのか改めて分担を決め日常的に安全点検を実行している。 ・ヒヤリハット、事故報告、トラブルなどは初期対応で教職員間の共有、対応、再発防止策の検討が徹底されている。定期的に地震・火事・保護者引渡し訓練を年間実施した。

7. 学校評価保護者アンケート

方法

学校教育法に基づき、幼稚園の自己評価の一環として、「園生活ふりかえり保護者アンケート」を12月末に実施した。全保護者の方々に4月からこれまでの園生活をふりかえった時の率直な気持ちを問うものであった。原則として昨年度のアンケートを基に、質問内容を検討して加筆修正し、最終的に「お子さんについて(14項目)」「園からの情報発信について(6項目)」「教育内容について(12項目)」の計32項目とした。

回答形式は4択(そう思う/ややそう思う/あまり思わない/まったくそう思わない)であった。各回答に1点~4点を付与し得点の高いほうが、「そう思う」程度が高くなるように数値化した。表2「園生活ふりかえりア

ンケート」には、質問項目ごとに平均値、標準偏差 (SD)、最大値、最小値を示した。さらに、大項目(「心豊かな成長と発達」「園と家庭の連携」「教育内容」、中項目(「社会情動」「興味関心」「体力向上」「生活習慣」)ごとに平均値を記載した。

また教職員に対しても、「園からの情報発信について (6 項目)」「教育内容について (12 項目)」の計 18 項目について同様のアンケートを実施して「教員がどのようにとらえているか」回答を求め、その平均値を併記した。

アンケートの回収率は 97%であり、全ての項目に欠損がなく有効回答だった。「お子さんの園生活を振り返って、お子さんにとって良かった点、成長した点などご感想やご意見等を入力してください。」という自由記述には、アンケート回答者のうち 64%から、結果が得られた。

結果

「園生活ふりかえり保護者アンケート」結果は、「お子さんについて」の質問平均値は 3.5 (SD=0.2) だった。この結果を「保護者が捉えた子どもの豊かな成長と発達」として表 1 に示した。中項目の「社会情動」は平均値 3.6、「興味関心」は平均値 3.4、「体力向上」は平均値 3.9、「生活習慣」は平均値 3.1 だった。

表 1. 保護者が捉えた子どもの心豊かな成長と発達

心豊かな成長と発達	14項目 (平均3.5, 標準偏差0.2)	平均	SD	最大値	最小値	カテゴリ
お子さんは、幼稚園生活を楽しんでいる		3.8	0.4	4	2	
お子さんは、その年齢や発達なりに遊びや生活の中で、してはいけないことがあることが分かり、守ろうとする態度が育ってきている		3.8	0.4	4	3	
お子さんは、園でしたことを家でもやってみたり、または話したりすることがある		3.5	0.7	4	1	社会情動
お子さんは、様々なことに興味を持ち、自分からやってみようとする		3.6	0.6	4	2	M=3.6
お子さんは、難しいことにも諦めずにやろうとする		3.1	0.6	4	2	
お子さんは、年上の子どもに憧れの気持ちを持ったり、年下の子どもに思いやりを持って接している		3.5	0.6	4	2	
お子さんは、歌ったり踊ったり、表現することを楽しんでいる		3.7	0.6	4	2	
お子さんは、自分なりに描いたり作ったりすることを楽しんでいる		3.7	0.6	4	1	興味関心
お子さんは、身近な生物、草花、樹木に興味関心を持っている		3.4	0.8	4	1	M=3.4
お子さんは、栽培や収穫も楽しみ、食に関心を持っている		3.3	0.7	4	2	
お子さんは、戸外で遊んだり、体を動かす子が好きである		3.8	0.4	4	2	体力向上
お子さんは、朝食を取ってから登園している		3.9	0.3	4	2	M=3.9
お子さんは、自分から挨拶するような姿がみられる		2.8	0.9	4	1	生活習慣
お子さんは衣服の着脱、手洗い、食事など身の回りのことを自分からしようとする		3.4	0.7	4	2	M=3.1

「園からの情報発信について (6 項目)」「教育内容について (12 項目)」の計 18 項目について、表 2 に「園と家庭の連携および教育内容について」として結果を示した。「園と家庭との連携」は平均値 3.7 (SD=0.5)、「教育内容」も平均値 3.7 (SD=0.5) だった。

表 2 において、保護者と教員を比較して高い数値の方を下線で示したところ、「園と家庭の連携」評価は教員の方が高い項目が多く、「教育の内容」評価も教員の方が高い項目がみられたが、統計的に有意な差はみられず、全般的に高い評価であった。

表 2. 園と家庭の連携および教育内容について—— 保護者と教員の視点の比較

園と家庭の連携 6項目 (平均3.7, 標準偏差0.5)	平均	SD	最大値	最小値	教員平均
園でのお子さんの様子は、行事、参観、実りだより、ドキュメンテーション、降園時の担任の話、玄関のホワイトボード「本日の活動」などでわかる	3.4	0.7	4	1	<u>3.8</u>
園は教育目標、保育の方針、内容について伝えている (入園時、月の予定、実りだより、わかふじ通信、クラス集会など)	3.7	0.5	4	3	<u>3.9</u>
園は、保護者と協力しながらお子さんを教育している	3.7	0.5	4	2	<u>3.8</u>
園は、お子さんについての相談や連絡に対応している	3.7	0.5	4	2	<u>4.0</u>
園は、来園時や電話などの際には、親切・丁寧に対応している	3.8	0.4	4	2	<u>4.0</u>
園は、お子さんのケガや、発熱などの連絡や対応が適切になされている	3.8	0.6	4	1	3.8
教育内容 12項目 (平均3.7, 標準偏差0.5)	平均	SD	最大値	最小値	教員平均
園は、お子さんの年齢や発達に応じた経験ができるように配慮している	3.7	0.5	4	2	<u>4.0</u>
園は、ひとり一人を理解し、個性に応じて対応をしている	<u>3.7</u>	0.6	4	2	3.5
園では、教職員同士が協力して活動している	3.6	0.5	4	2	<u>4.0</u>
園は、日々の教育を見直し改善に努めている	3.6	0.6	4	2	<u>3.9</u>
園は、健康作りや体力作りを進めている	3.8	0.5	4	2	<u>3.9</u>
園は、身近な自然や社会と関わる体験に配慮している	<u>3.9</u>	0.4	4	3	3.8
園は、お子さんが人と関わる力が育つよう配慮をしている	3.7	0.5	4	2	<u>3.9</u>
園は、お子さんが表現を楽しみ、意欲を発揮するように配慮している	3.7	0.5	4	2	<u>3.8</u>
園は避難訓練、園外保育での交通安全指導などで、お子さんが安全に対する意識や習慣が身につくよう配慮している	3.8	0.4	4	2	<u>3.9</u>
園は、野菜や植物栽培、収穫、試食などを通して、園児の食育を育てている	3.8	0.5	4	2	3.8
園は、特色ある教育活動の実践に努めている	<u>3.6</u>	0.6	4	2	3.3
園は、小学校との交流を通して園児が小学校生活に憧れや期待を持てる機会が設けている	3.8	0.4	4	3	3.8

自由記述 (任意) では、4月からこれまでに、子どもがここまで育ったことの感動や、教員へのねぎらい等温かい言葉が寄せられた。K J法によりカテゴリ分類し「友達関係の広がり」「育ってきた子どもの姿」「園への要望」の3カテゴリを抽出した。記述内容が複数カテゴリに該当する場合は、記述内容を分割して各カテゴリに振り分けることも考えられるが、記述した文脈の流れが損なわれることから、記述の主要部分に該当すると判断したカテゴリに分類した。

表 3 「友達関係の広がり」に分類された自由記述内容

「友達関係の広がり」についての記述 (抜粋)	自由記述内容
<ul style="list-style-type: none"> ・会話の内容を理解できるようになった、友達と仲良く遊べるようになった ・1人でずっと黙って見てることが多かったが少しずつ友人と遊べるようになった ・まだ自分からは挨拶はできませんが、おはようと声をかけられるとおはようと返せるようになりました。些細なことですが、成長を感じます。 ・自分の意見を友達に伝えられるようになりました。体力もつき、より活発になったと感じます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お友達の名前が出て、同世代のお友達と一緒に遊ぶようになった。 ・縄跳びやマラソンなど、お友達と一緒に取り組んで、できるようになった事が多かった。 ・園外保育、クローバー、わくわく等いつものメンバーと違う環境に置かれる事が刺激になっている。 ・遊びや行事の中で、お友達と協力し合い過ごせた事が良かった。 ・友達や先生の名前が家で挙がる事が多くあり、園生活は楽しく友達と過ごせている、と想像します。子供の姿を見ると、周囲の人との関わり、社会性を学び始めたのだろう、と成長を実感します。
	<ul style="list-style-type: none"> ・お友達と一緒に給食を食べる事で苦手な物に挑戦して、食べられる物がだいぶ増えた。 ・いろいろなお友だちがいるので、家ではしない遊びが出来ていると感じます。 ・お友達への接し方や思いやる気持ちが育ってきているような気がします。 ・お友達との関わり方で順番や貸し借り、気持ちの伝え方など成長したと感じました。

「友達関係の広がり」に分類された自由記述の抜粋を表3に示した。文部省の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に照らした場合、「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」に関する内容の記載であった。

表4 「育ってきた子どもの姿」に分類された自由記述内容

「育ってきた子どもの姿」についての記述(抜粋)	
<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園に入園してから、様々なことに興味を持ってチャレンジし言葉が増えコミュニケーションを取れるようになった。／自分で考えて行動するようになった。 ・園外保育をたくさん経験し、長い距離を歩けるようになった。 ・本人にとって難しい課題も、先生が本人のペースを見ながらチャレンジさせてくれたように思います。／特に工作が好きになり、家でも色々なものを作ってくれます。 ・靴や服の脱ぎ着や手洗いうがい、トイレ等自分の身の回りのことをしっかり家でも出来るようになった。 ・季節ごとの行事も含めて次々と新しい体験ができる園生活は、子どもにとってとても刺激的だっただろうと思います。／折り紙も上手にできるようになってきました。 ・園で覚えたことを家で披露する機会も多く、子どもの吸収力の早さに驚かされる日々でした。／園生活での出来事や気持ちを話してくれるようになりました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練や交通ルールを普段も自主的に実践するようになった。 ・先生が言ったこと、注意点、明日忘れてはいけないものなどを子ども自身が、親に話してくれる様になったのが成長を感じます。” ・お米栽培や植物栽培などを体験させてくださったおかげで、自分でも図書館で野菜の本を借り栽培する事に興味を持ち始めた。 ・運動会やリズム発表会では昨年よりクラスの皆と楽しみながらリズムや動きを合わせようとする姿が見られて、成長を感じました！ ・運動会やリズム発表会の練習で苦手なことを家でも練習して、できるようになりとても喜んでた。すぐに諦めずに、頑張ろうと思えるように先生方が声掛けや配慮をして下さったおかげだと思うので、とても感謝しています♪あと日々幼稚園楽しかった～明日何するのかな～とわくわくして、行っている姿を見てこちらも嬉しいです♪

「育ってきた子どもの姿」に分類された自由記述内容を表4に示した。文部省の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に照らした場合、「健康な心と体」「自立心」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」に関わる記載の内容であった。

表5 「園への要望」に分類された自由記述内容および園から保護者への回答

「園に対する要望」についての記述(内容と回答)	
<ul style="list-style-type: none"> ・<u>りぼん組 Web 申込みフォームが使いづらい。</u> ⇒ ご意見ありがとうございます。次年度よりシステムの変更を検討しています。新システムが整い次第、お知らせいたします。 ・<u>りぼん組利用の変更連絡が担当者に伝わっていなかった。</u> ⇒ 園内での連絡連携をこれまで以上に心がけます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>遠足、運動会、リズム発表会などそれぞれにアンケートがあれば良いと思う。</u>⇒ 教育活動への高い関心を寄せいただきありがとうございます。アンケートがご負担ではないと分かりほっとしました。2025年度は「日常で身体を動かす活動(5月実施)」、「お泊まり保育事後アンケート(7月)」、「園生活ふり返りアンケート(12月)」の3回の調査にご協力いただき、結果を教育活動に反映するよう教育課程に組み込んでいます。
<ul style="list-style-type: none"> ・<u>行事に関することと日常保育活動の関係についてご意見</u> ⇒ 貴重なご意見をありがとうございます。この2年間をかけて、行事のあり方、保育活動内容の見直しを検討してきました。日々の保育活動の充実と、行事の日程や、行事の内容を検討した結果、次年度はこれまでと年間の活動が変更されます。2月中旬に、そのお知らせを配信する予定です。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>行事に関することと日常保育活動の関係についてご意見</u> ⇒ 貴重なご意見をありがとうございます。この2年間をかけて、行事のあり方、保育活動内容の見直しを検討してきました。日々の保育活動の充実と、行事の日程や、行事の内容を検討した結果、次年度はこれまでと年間の活動が変更されます。2月中旬に、そのお知らせを配信する予定です。

園への要望に分類された自由記述については、教員間で保護者の意見を共有し意見交換を行い、園からの回答も含め、結果の全ては保護者に文書で報告をした。この保護者評価を踏まえ、次の点を留意していくことを教職員間で共有した。現在、お知らせやお便りが全てオンライン化され、また年度の切り替えでキャッシュレス

化を推進しているが、保護者が画面上で情報を受ける点を考慮し、簡潔、明瞭、丁寧な記載をより一層心がけること。また保護者は「わが子がこのような思いをしているのではないか」という基準で園生活を捉え、評価している場合、時には誤解や思い違いをされる可能性もあるので、園でのお子さんの姿を丁寧に伝えていく必要があることが確認された。

8. 学校関係者評価会議での評価

学校関係者評価会議は有識者 2 名（大学教員・特別支援学校教諭）、地域代表 2 名（地域中学校教諭、町内役員）、保護者の会会長 1 名、園長、副園長、主任の 8 名で構成された。評価委員のそれぞれの立場から、次のような評価や助言を得た。

1) 保育活動について

保育の目標を立て、その内容がいつも充実している。子どもひとり一人が大切に保育されている。保護者の評価アンケートからも満足度の高さが現われている。客観的数値として「お話が上手にできない」などわが子の育ちを低く評価している保護者も、自由記述では子どもの成長をとらえていることから、保護者からの評価も、数字だけでは表されない中身を捉えていくことが意味のあることだといえる。

2) 意欲的な新しい取り組み実践について

毎年、新しいことを始めていて驚きがある。保育ドキュメンテーションは写真を撮って吹き出しを入れる。教員にとって、写真から沢山の気づきを得ることは大事だと思う。写真によって撮影者である教員がどのようにその場を捉えているのかを言語化でき、教員間で活動を共有できる。子どもにとって、その場の日常の一瞬を子ども自身が自分の言葉で伝えることで、親子で経験を共有できる。保護者にとって、保育ドキュメンテーションから保育の様子、雰囲気、状況がイメージ化できる。食育も、市の栄養士にきてもらっての調理実習へとその幅を広げている。このように生活に根付いた取り組みは評価できる。

3) 中学生との年間を通した交流について

中学生との交流も 2 年目となり、年間を通しての活動を教育課程に位置づけ、事前事後の連携をさらに深め、幼中共同のアプローチカリキュラム作成に至っている点も評価される。中学生も園児も交流を通して、日常見られない一面が見られたことと思い、今後も是非この活動を続けて欲しい。スポーツウェアや制服で公園やショッピングモールに行くと、中学生が声をかけてくれることがあり、子どもがとても喜んでいる。中学生からもらうお手紙も子どもが喜んでいる。園と中学校の場だけの交流から地域の交流へと広がっている。子どもを中心として地域に根付いている点が評価できる。

4) 改めて学校教育を俯瞰的に捉える必要性について

就学前の教育施設とそれ以降の教育施設とが、様々な点で共通性があり、継続していることを再認識した。主体的な学び、教育課程の中での行事の位置づけ、教職員の働き方改革と就学前も含めた学校教育のあり方などは、学校種にとらわれず、子どもの育ちとして俯瞰して捉えていく課題である。例えば、年代は違っても、園で食育として行なっている調理実習、また中学生の調理実習などを交流活動にに取り入れることによって領域や教科を越えた総合的学習として位置づける可能性もあることを学校評価会議で確認した。